

地域情報（県別）

【香川】「アカデミック活動の充実した地方病院へ」研修医に英語論文指導-藤川達也・三豊総合病院内科部長に聞く ◆Vol.1

2020年9月11日 (金)配信 m3.com地域版

地方の総合病院では全国的に珍しい研修を行っている医療機関が香川県にある。三豊総合病院（観音寺市）では、初期研修医に英語論文の書き方を教えるほか、国際学会に参加して英語で発表してもらおう機会を与え、さらに院外から著名な医師を招いて座学と実技指導も行う。これらの活動を2014年に発案、指揮を執っているのが指導医の内科部長・藤川達也氏だ。まずは英語論文指導の内容と始めた経緯について聞いた。（2020年7月28日にインタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら

▼第3回はこちら

——先生とはSNSを通じて知り合い、以後、メールでお話を聞かせてもらっていました。その中で特に面白いと思ったのが、先生が在籍する三豊総合病院の研修内容です。改めて特徴をお聞かせください。

当院は初期研修医と専攻医を受け入れていて、専攻医には内科専門医と総合診療専門医の資格が取れるプログラムを提供しています。研修の主な特徴は2つあり、1つが検査の経験を豊富に積めること、もう1つがアカデミックな活動が充実していることです。

まず前者について、在籍する医師の多い消化器内科と循環器内科、外科では研修医のやる気を汲む環境や風土があります。「将来的に消化器を専門にしたい」といったような意志の強い人であれば関わる検査を増やすことが可能で、例えば胃の内視鏡検査では初期研修医でも年に100件ほど携わった例があります。地方でも人気の研修病院では「なかなか検査にタッチさせてもらえない」といった声を聞くこともありますから、これは一つの特徴と言えるのではないのでしょうか。

もう一つのアカデミック活動は私が注力していることで、具体的には①英語論文指導、②国際学会への参加と発表、③外部著名医師による座学と実技指導——です。初期研修医の時点から希望者にはこの3つを行っています。



内科部長の藤川達也氏（藤川氏提供）

——アカデミック活動のうちまずは英語論文指導からお聞きしたいのですが、具体的にはどんなことを行っているのでしょうか。

英語論文指導は文字通り、研修医に英語論文を書いてもらい、医学雑誌への投稿から掲載までをマンツーマンで私がサポートしている活動です。

研修医に書いてもらっている論文はいわゆる「クリニカルイメージ論文」または「クリニカルピクチャー」と呼ばれるもので、これは主に1人の患者の症例について1枚の検査画像と150～200字ほどの解説文が付いています。「画像を中心とした短いケースレポート」と理解してもらえるといいかと思います。

テーマ決めについては私が過去に担当した印象的な症例を研修医に提案することもありますし、また、研修医が診療中に会った珍しい症例について「これは論文化できるんじゃない？」と勧めることもあります。

目標は研修期間によって異なり、半年間の場合は研修医が執筆の主軸となるファーストオーサーとして論文を書き、1本受理（アクセプト）されること。1年間の場合はそれに加えて、研修医自らが雑誌にオンライン投稿をし、編集部からの指摘に対して修正を加えて再送するなど一連のやり取りを英語で行えること、としています。

——現在までの活動の成果はいかがですか？ 地方の病院がこうした活動を行うのは珍しいのでは。

私が当院で指導医を担当するようになったのが2014年で、程なくしてこの活動を始めたわけですが、それから1年以内に研修医の論文が初めて雑誌に掲載され、以来、定期的に載っています。

研修医の人数は時期によって異なりますが近年は4～8人で、年に1～3本の論文が研修医によって書き上げられています。クリニカルイメージ論文は複数の雑誌に投稿できるので、完成した論文のうちおよそ9割はアクセプトされていますね。

私たちはトップジャーナルを狙っていて、また論文をそもそも英語で書いていることもあり、投稿先は主に海外の雑誌です。初期研修医が書いた論文が世界的に権威のあるランセットの姉妹紙「Lancet Infectious Diseases」に載ったり、当院で初期研修を受けた他院の医師の論文が世界最高峰のニューイングランド・ジャーナル・オブ・メディシン（NEJM）に掲載された例もあります。

取り組みの珍しさについてですが、初期研修医の時点から英語論文の書き方を教えている病院は全国でも少ないのではないのでしょうか。大学病院ではそこそこあると思いますが、大学病院では指導医が自分の仕事に追われていることも少なくないので、当院のように指導医がつきっきりでテーマ決めから赤ペン添削、掲載までをサポートするのは難しいように思います。



2018年に研修医と参加した国際学会「SHM」（藤川氏提供）

——英語論文執筆を指導しているということは、先生ご自身が英語で論文を書けるわけですね。この活動を始めた経緯も含めてお聞かせください。

はい、私も2012年から英語でクリニカルイメージ論文を書いていて、今も年に4、5本は雑誌に投稿しています。

私が英語論文を書こうと思ったのは元をたどれば基礎研究に携わったことが関係しています。私は1998年に岡山大学医学部を卒業後、同大の大学院で基礎研究に携わり修了。その後、米ハーバード大学医学部の教育病院で引き続き基礎研究を2年ほど行いました。

私自身はこの間に大きな仕事を成し遂げることはできませんでしたが、留学中はすぐ近くでトップレベルの研究が行われていたわけです。そんな環境に刺激を受け、「また何かアカデミックな活動がしたい」と帰国後も漠然と思いつけていたところ、知ったのがクリニカルイメージ論文の存在でした。「これなら臨床をしながらでも取り組みやすいし、論文を積み上げていく最初のステップに適しているのではないか」。そう思ったのがきっかけです。

研修医に教えようと思ったのはある学生の発言に着想を得たからです。指導医になったちょうどそのころ、ある懇親会で他院を研修先として志望していた学生にその理由を尋ねました。その学生は、「そこでは臨床経験を積みながら学会参加やセミナー受講などアカデミックなことも経験させてくれるから」と答えました。

ああ、そうかと。研修病院では臨床と学術活動のどちらか一方に力を入れるところが多く、両方をバランス良く実践している病院は少ないのではないかとそのときに思ったんですね。

当院の臨床研修に関しては先ほど話したように検査経験を豊富に積めることが特徴です。「であるならば、アカデミックな地方病院という特色を新たに加えることで、医師や医学生により興味を持ってもらえるかもしれない」。こう思い、実際にトライしました。

◆藤川 達也（ふじかわ・たつや）氏

1998年岡山大学医学部卒。同大大学院を修了後、米国ハーバード大学医学部の教育病院ベス・イスラエル・デューコネス・メディカルセンターで2年間、基礎研究に従事。帰国後、備前病院や清恵会病院などを経て、2012年に三豊総合病院に勤務。2014年から指導医を担当。同院内科部長。日本内科学会総合内科専門医、日本消化器病学会消化器病専門医、日本糖尿病学会糖尿病専門医、日本病院総合診療医学会専門医、日本内科学会指導医。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

